

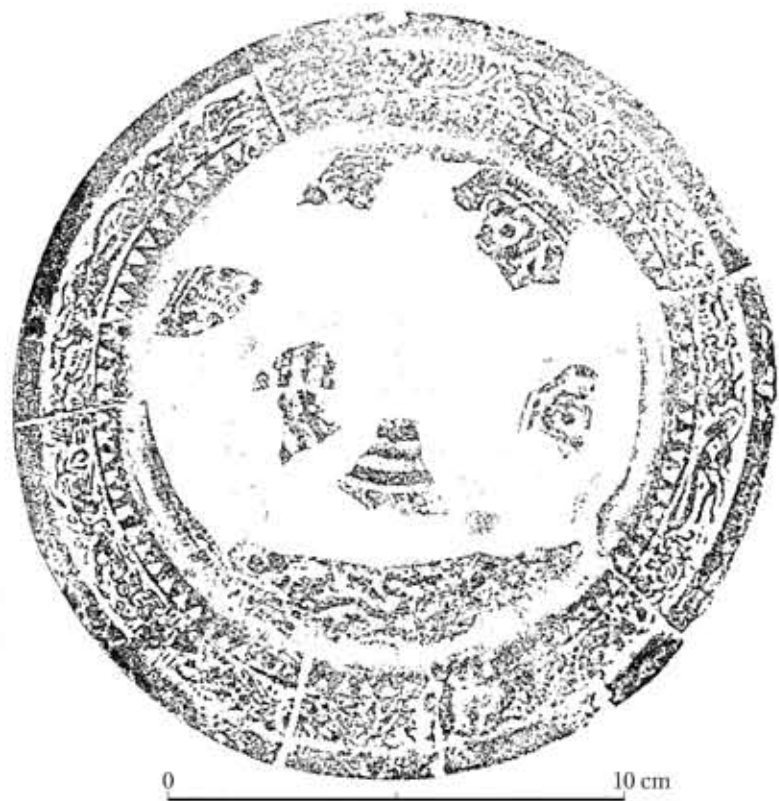
# 山之越古墳 発掘調査現地説明会資料



上の写真は、山之越古墳の墳丘上にある長持形石棺です。この石棺は地元の石材である竜山石（流紋岩質溶結凝灰岩）で作られています。南に位置する壇場山古墳や櫛之堂古墳でも使用されています。これらと同じ竜山石で作られた長持形石棺は、当時の王権の中核である畿内において最も格式の高い棺として使用されました。

山之越古墳の石棺は、明治30年に坪井正五郎と和田千吉によって調査されました。棺の中は白い河原石が敷かれ、その上に北を枕にした人骨、棺の中央付近から鏡1面、勾玉3個、管玉数個が出土し、棺の長軸に沿って刀剣類が切先を南に向けて並べられていたようです。

左の拓本はその時に出土した獣帯鏡です。直径は16.4cmです。この鏡は報告された時点で既に内側の大半を失っていたようです。現在は、鏡の縁の一部を姫路市埋蔵文化財センターで保管しています。



『姫路市史』第7巻下 2010 から転載



姫路市埋蔵文化財センター





山之越古墳は、兵庫県下最大の方墳です。周りを道路が取り囲んでいることから周濠の存在が指摘されていました。その有無を明らかにするために調査を行いました。



周濠は検出した上幅で約17m、濠底幅は11～12mありました。濠底から石棺までの高さは約9mで、本来はもう少し高かったと考えられます。



葺石は、現在の墳丘端より4.5m～6.5mの位置で見つかりました。15～30cmの凝灰岩の角礫を使用し、崩落した石の間からは埴輪片が見つかりました。



トレンチ2でも濠の埋土が確認できました。埋土からは奈良～平安時代の土器片が見つかることから、周濠はこの頃には埋まっていたことが明らかになりました。